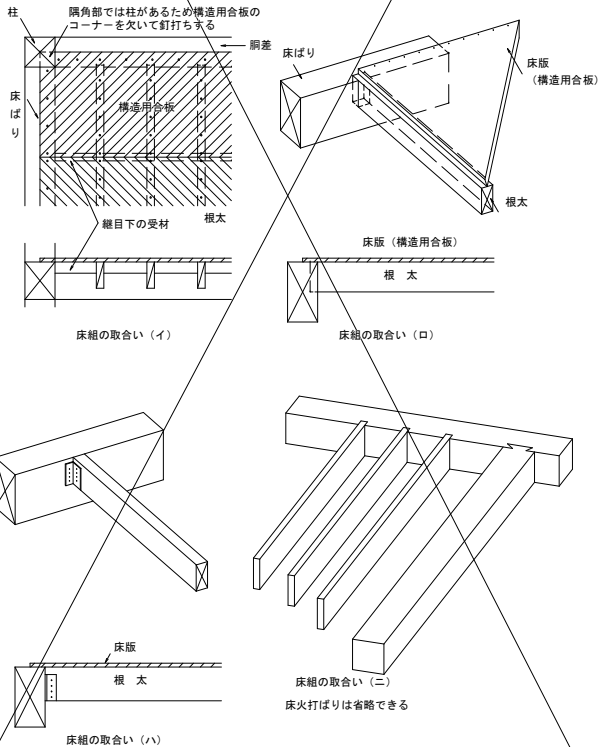


床組詳細図

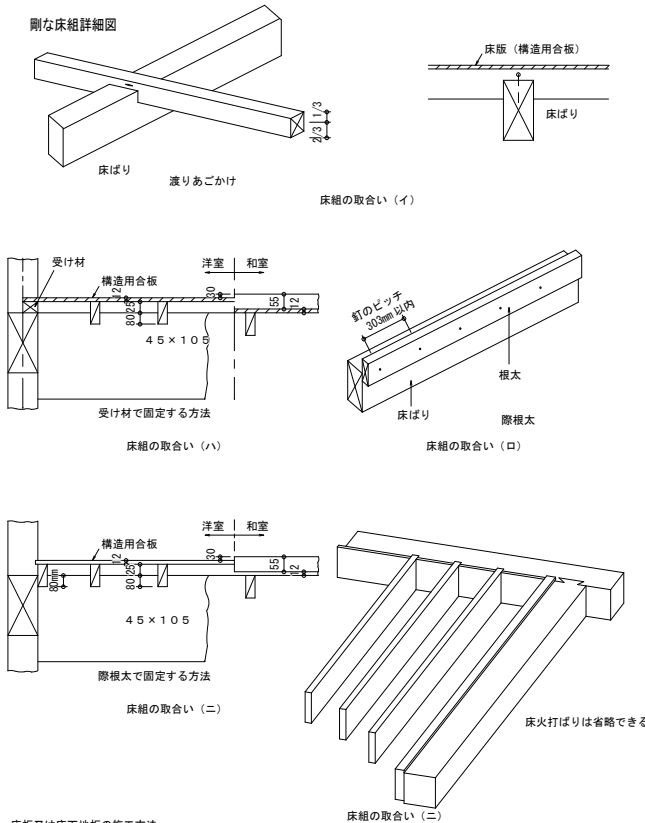
(1) 床組 (2階床、3階床) (剛な床組)

1. 水平構面の剛性が十分期待できる床の施工 (剛な床組)  
(床の剛性は耐力壁線に囲まれた構面を単位に考える)  
次のイ、ロ、を満足すること
- イ. 床下地板は構造用合板 12mm以上を使用し、合板の四周边は床ばり、  
胴差又は受け材等に固定する。
- ロ. 断面寸法 105mm×105mm以上の床ばりを 1820mm内外の間  
隔にはり間方向又はけた行方向に配置する。
- ア. 根太と床ばり、胴差の上端高さが同じ場合の施工方法  
根太は床ばり、胴差に大入れ差しこみ釘 2N75を斜め打ちとするか、  
又は根太受け金物等を用いて床ばり、胴差に留めつける。この場合  
構造用合板を床ばり、胴差に釘で直ばりすることが重要である。  
ただし、隅角部では柱があるため構造用合板のコーナーを欠いて  
釘打ちする。
- バ. 根太と床ばり、胴差の上端高さが異なる場合の施工方法  
床ばり、胴差に直行する根太は渡りあごかけとし釘 2N75を斜め  
打ちとする。また、床ばり、胴差の際に隙根太又は受け材を添えつ  
け床板構造用合板の四周边を固定する。隙根太、床ばり胴差へN90  
釘打ち間隔 303mmで平打ちする。

剛な床組詳細図



剛な床組詳細図



床板又は床下地板の施工方法

- (イ) 種類 厚さ 12mm以上の構造用合板を用いる。そのサイズは 3×6  
版とし小間切したものを使用しない。
- (ロ) 張り方 構造用合板の長手方向を根太と直交させかつ平島張りとする  
構造用合板の継手は根太上で突きつけ継ぎとし継目下に受材 (4. 5  
× 4. 5 cm) を設ける。
- (ハ) 釘打ち 構造用合板の釘打ちは N50 を用い釘打間隔 150mm以下  
で床根太又は床ばり胴差・受け材等に平打ちする。
- (ニ) 床根太の寸法は 45×105mmを標準とし、その根太間隔は 455  
mm以下とする。ただし、床ばり間隔は 1820mm以下とする。
- (ホ) 床ばり、胴差の仕口補強  
柱と床ばり・胴差、床ばりと胴差の仕口は、金物、ボルトにより  
十分緊結補強する。

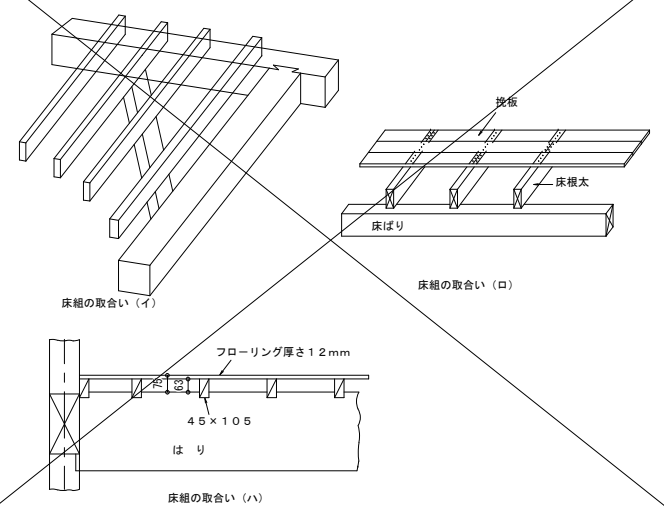
(2) 水平構面の剛性が十分期待できない床の施工方法 (柔な床組)

(前記 1. によらない床)

(特記無き限り剛床採用の事)

- (イ) 耐力壁線に囲まれた隅角部には必ず床火打ばりを挿入する。
- (ロ) 床板の種類は、厚さ 12mm以上の構造用合板又は桧板等を用いる。
- (二) 床根太の寸法は 45×105mmを標準とし、その根太間隔は 455  
mm以下とする。ただし、床ばり間隔は 1820mm以下とする。
- (ホ) 床ばり、胴差の仕口補強  
柱と床ばり・胴差、床ばりと胴差の仕口は、金物、ボルトにより  
十分緊結補強する。

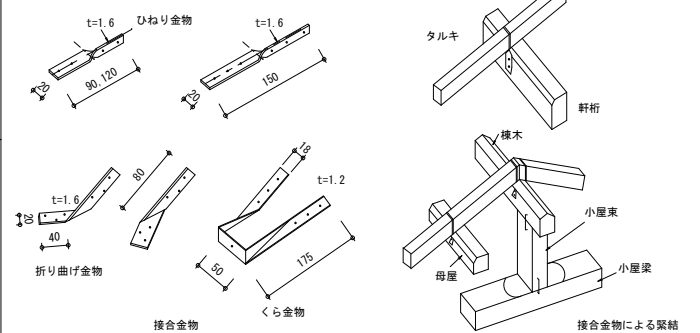
柔な床組詳細図



(3) 屋根・小屋組の耐風対策

1. 屋根面や軒先およびけらばの部分には大きな吹上げ力が働く。  
特に軽い屋根で勾配がゆるい場合はその値は大きくなる。小屋組は  
水平構面の剛性を高めるためと、風に抵抗するため必要である。
2. 以下小屋組の各部について述べる。
- ① 小屋火打ばり  
火打ばりは耐力壁線に囲まれた隅角部にはかならず挿入する。
- ② 小屋筋かいおよびけた行筋かい・振れ止め  
小屋組の一体化を図るために、小屋束相互及びはり・桁にまたがり  
筋かい 15×90mm以上、釘 (2-N50) にて固定する。
- ③ 軒  
軒先部は吹上げが大きくなるのでたるときは軒筋かい・金物等で緊結
- ④ たるき  
軒先や、妻側又は棟部のたるときは吹上げが大きくなるので棟木及び  
母屋への緊結方法を考慮する。例としてはそれぞれ緊結金物等にて
- ⑤ 棟木母屋  
棟木と第2母屋も吹上げる力が大きくなるので小電線は注意し
- ⑥ 小屋束  
小屋束下部と小屋ばりあるいは妻ばり桁との留付部も留置ける。

接合金物他詳細図



NOTE

株式会社アイマーク一級建築士事務所

一級建築士事務所登録：第12842号

一級建築士大臣登録：第193494号

国本 正和

SCALE

DATE H 2 8 . 8

JOB NAME

平成28年度 表丹沢野外活動センター普の生活学習館 (仮称) 建設工事

TITLE

床組詳細図

S

03